

# 曾根崎心中（お初天神記）

實にや云々―詠  
曲田村にある句  
三ツづつ云々―  
大阪三十三番の  
觀音  
をりは―下りる  
に双六の事をか  
く  
云目―我欲する  
賽の目、三六も  
門と賽の目とか  
く  
酒世花―燕子花  
なれどもお初  
みめよきに野ふ  
氣のとはる―左  
大臣強が鹽竈の  
景を横せしを取  
りていへり  
鳥も二番―二番  
鳥も二番とかけ  
たり  
擬のよしあし―  
妾の良否

實にや安樂世界より、今此娑婆に示現して、我等が爲の觀世音、仰ぐも高し高き屋に、  
登りて民の賑ひを、契りおきてし難波津や、三ツづつ十ウと三ツの里、札所々々の靈地  
靈佛、廻れば罪も夏の雲、熱くろしとて駕籠をはや、をりはの乞目三六の、十八九なる  
顏世花、今咲出しの初花に、翁は被ずとも召さずとも、照日の神も男神、除けて日負は  
よもあらじ。頼みありける巡禮道、西國三十三所にも向ふと聞ぞ有難き。一番に天満の  
大融寺。此御寺の名も古りし、昔の人も氣のとはるの、大臣の君が鹽竈の、浦を都に堀  
江漕ぐ、汐波舟の跡絶えず、今も弘誓の櫓拍子に、法の玉鉾ゑい。大阪巡禮胸に木  
札の普陀落や、大江の岸に打つ波に、白む夜明の、鳥も一番に長福寺。空に眩き久方の、  
光に映る我影の、あれく走れば走る。これく又留れば留る。振のよしあし見る如く、  
心も嗚や神佛、照す鏡の神明宮。拜み廻りて法住寺。人の願ひも我如く、誰をか戀の祈

法界寺一懸の祈  
りと法界信氣と  
かくしや一梓にて  
はてなる事

小長谷一伯母に  
かく

けいてん寺一好  
い景色と以傳寺  
とかく云々一上  
りは辛いが下り  
は樂

所體一身証

菩提寺一菩提樹  
にて球戯を作る  
故にいふ一男女  
の朝の別れ

りぞと、仇の悟氣や法界寺。東は如何に大鏡寺。草の若芽も春過て、遅れ咲なる菜種や

罌粟の、露に憔るよ夏の蟲。おのが妻戀ひ優しやすしや。彼地へ飛つれ、此地へ飛連れ、

彼地やこち風ひたくく、羽と羽とを袷の袖、染た模様を花かとして、肩にとまればお

のづから、紋に揚羽の超泉寺。さて善道寺栗東寺。天滿の札所残りなく、其方にめぐる

夕立の、雲の羽衣蟬の羽の、薄き手拭暑き日に、貫く汗の玉造。稻荷の宮にまよふとの、

闇はことほり御佛も、衆生の爲の親なれば、是ぞ小長谷の興徳寺。四方に眺めの果し

なく、西に船路の海深く、波の淡路に消えすも通ふ、沖の潮風身に染む鷗。汝も無常の

烟に咽ぶ。色に焦れて死ふなら、しんぞ此身は成次第。さて實に好いけいでん寺。縁に

引れて又何時か、此處に高津の遍妙院。菩提の種や上寺町の、長安寺より誓安寺。上

りやすなく、下りやちよこく、上りつ下りつ谷町筋を、歩みならはす行きならはね

ば、所體くづをれア、恥しの、森で裳裾がはらくく、はつと翻るを打搔合せ、ゆる

みし帯を引締めく、しめて絆はれ藤の柵。十七番に重願寺。これからいくつ生玉の、

本誓寺ぞと伏拜む。珠數に繫かん菩提寺や。はや天王寺に六時堂、七千餘卷の經堂に、經

讀む鳥のときぞとて、餘所の待宵きぬぐも、思はで辛き鐘の聲、こん金堂に講堂や、

通る煙管―風が  
通ると煙管の通  
るとかく

相思草―煙草

道草―道にて手  
間とる

ばくち―猿は  
要を食ふ故續け  
たり  
佛神水波―佛神  
はもと一つ

平野屋―火をか

雄男―美男

桃の酒―徳兵衛  
は酒も少しのめ

5

萬燈院に灯す火は、影も耀く蠟燭の、しん清水にしばしとて、懸て休らふ逢坂の、關の  
 清水を汲上つ、手に拵び上げ口嗽ぎ、無明の酒の酔さます、木々の下風ひやくくと、右  
 の袖口左の袖へ、通る煙管に燻る火も、道の慰み熱からず。吹て亂るゝ薄煙、空に消え  
 ては是も亦、行衛も知らぬ相思草、人忍ぶ草道草に、日も傾きぬ急がんと、又立ち出る雲  
 の脚。時雨の松の下寺町に、信心深き真光寺。覺らぬ身さへ大覺寺。さて金臺寺大蓮寺。  
 廻りくゝて是ぞはや、三十番にみつ寺の、大慈大悲の頼みにて、かくる佛の御手の糸。  
 白髪町とよ黒髪は、戀に亂るゝ妄執の、夢を覺さんばくらうの、此處も稻荷の神社。佛  
 神水波のしるしとて、薨竝べし新御靈に、拜みおさまるさしもぐさ。草のはす花世に  
 まじり、三十三に御身をかえ、色で導き情で教へ、戀を菩提の橋となし、渡して救ふ觀世  
 音。誓ひは妙に三重有難し。立迷ふ浮名を餘所に漏さじと、包む心の内本町。焦ると胸  
 の平野屋に、春を重ねし雄男。一ツなる口桃の酒、柳の髪もとくくと、呼れて粹の名  
 取川。今は手代と埋木の、生醬油の袖したよるき、戀の奴に荷はせて、得意を廻り生玉  
 の、社にこそは著にけれ。出茶屋の床より女の聲、「ありや徳さまではなにかいの。コレ  
 徳様々々」と手をたよけば、徳兵衛合點して打領き、「コレ長藏、おれは後から往のほどに、

取や取れよ

酒にする云々  
酒のむと暫譯い

梨も磔沙汰な  
き事(監)

つんとーとんと

やみらみつちや  
癖茶苦茶の義  
皮袋にはさせる  
煎なし

其方は寺町の久本寺様、長久寺様、上町から屋敷方廻つて而して内へ往や。徳兵衛も早戻ると言や。それ忘れずとも、安土町の紺屋へ寄て錢取やや。道頓堀へ寄やんなや」と、影見ゆるまで見送りく、簾を上げて、徳コレお初じやないか。是は如何じや」と編笠を脱んとすれば、初ア、先づ矢張被て居さんせ。今日は田舎の客で、三十三番の観音様を廻りまし、此處で晩まで日暮しに、酒にするじやと贅言て、物真似聞にそれ其處へ。戻つて見れば、むづかしい。駕籠も皆知んした衆。矢張笠を被て居さんせ。それは左様じやが此頃は、梨も磔もうたんせぬ。氣遣ひなれど内方の、首尾を知らねば便宜もならず。丹波屋まではお百度ほど訪ぬれど、彼處へも音信もないとある。ハア誰やらがヲ、それよ。座頭の太市が友達衆に聞けば、在所へ往んしたといへども、つんと誠にならず。ほんに又餘りな。妾は如何ならふとも聞たうもないかいの。此方様それでも濟もぞいの。妾は病ひになるはいの。嘘なら是れ此瘡を見さんせ」と、手を取て懐の、うち怨みたる口説泣。ほんの夫婦にかはらじな。男も泣て、「ヲ、道理々々。去ながら言ふて苦にさせ、何せうぞいの。此中おれが憂苦勞、盆と正月其上に、十夜お祓ひ煤掃を、一度にすると斯うはあるまい。心の内はむしやくしやと、やみらみつちやの皮袋。銀事やら何じややら、

譯は京へも上つて来る。能ふもく徳兵衛が命は續きの狂言に、したらば哀にあらふぞと、溜息ほつとつくばかり。初「ハテ輕口の段かいの。それ程に無い事をさへ妾にはなぜ言んせぬ。隠さんしたは仔細がある。何故打明て下んせぬ」と、膝に凭れてさめぐと、涙は延紙を浸しけり。猶「ハアテやんな、恨みやるな。隠すではなけれども、言ふても埒の明ぬ事。さりながら大概先づ濟よつたが、一伍一什を聞てたも。おれが旦那は主ながら現在の叔父甥なれば、懇切にも預る、又身共も、奉公にこれほど油断せず。商ひ物ももじひらがな違へた事のあらばこそ。此頃裕を仕様と思ひ、堺筋で加賀一疋、旦那の名代でかひがかる。是が一期に只た一度。此金もすはと言へば、著替賣ても損かけぬ、此正直を見て取て、内儀の姪に二貫目附て夫婦にし、商賣させうといふ談合。去年からの事なれど、和女といふ人持て、何の心が移らうぞ。取りあへもせぬ其内に、在所の母は繼母なるが、我に隠して親方と談合極め、二貫目の金を握て歸られしを、此控侘が夢にも知らず。後の月からもやくり出し、押て祝言させうとある。其處で俺も勃として、やあら聞えぬ旦那殿、私合點いたさぬを、老母を賺したよきつけ、餘りな成されやう。お内儀様も聞えませぬ。今迄、様に様を付け崇まへた娘御に、金を付けて申受け、一生女房の

もじひらがな一  
字一字假名一ツ  
取りあへもせぬ  
一相手にせぬ  
控侘一まぬけ  
もやくりだし一  
隠ぎ立つる

金を立て一金を出せ

しやれ貝肉のとれたる貝

家燬一放火師

左様した一心中

機嫌取り、此徳兵衛が立ものか。嫌といふからは、死だ親父が蘇生り申すとあつても否で御座ると、詞を過す返答に、親方も立腹せられ、おれが夫れも知て居る。蜷川の天満屋の初めとやらと腐り合ひ、嗅が姪を嫌ふよな。好い此上は最う娘は遣ぬ。遣ぬからは金を立。四月七日までに屹度立て。商ひの勘定せよ。まくり出して大阪の地はふませぬと怒らるよ。それがしも男の我。ヲ、ソレ畏つたと在所へ走る。又此母といふ人が、此世が彼の世へ歸つても、握た銀を放さばこそ。京の五條の醬油問屋、常々金の取遣すれば、これを頼みに上つて見ても、折しも悪う銀もなし。引返して在所へ行き、一在所の詫言にて、母より金を請取たり。追付返し勘定仕舞ひ、さらりと埒が明くは明く。されども大阪に置れまい時には如何して逢れふぞ。假へば骨を碎かれて、身はしやれ貝の蜷川、底の水屑とならば成れ。汝が身に放れ如何せう」と、咽び入てぞ泣居たる。お初も共に喘く涙、力をつけて押留め、「さてくいかい御苦勞。皆妾故と思ふから、嬉し悲しう忝し。さりながら、心慥に思召せ。大阪を堰れさんしても、盗み家焼の身ではなし。如何してなりとも置く分は、妾が心にあることなり。逢ふに逢れぬ其時は、此世ばかりの約束か。左様した例しの無ではなし。死ぬるをたかの死出の山。三途の川は堰く人も、

後の月一先月

男磨く一快氣者

初瀬云々一謡曲  
三井寺の句にて  
後句は徳兵衛來  
て見ればにかく

せかるよ人もあるまい」と、氣強う勇む詞の中、涙に咽て言させり。お初重ねて、「七日といふても明日の事。とても渡す金なれば、早ふ戻して親方様の、機嫌をも取らんせ」といへば、徳「ア、左様思ふて氣が急ぐが、和女も知た彼の油屋の九平次が、後の月の晦日、只た一日要る事あり。三日の朝は返さうと、一命かけて頼むにより、七日までは要らぬ金。兄弟同士の友達の爲を思ひて、時貸に貸たるが、三日四日に便宜せず。昨日は留守で逢もせず。今朝尋ねふと思ひしが、明日限に商ひの勘定も仕舞はんと、得意廻りで打過たり。晚には行て埒明ふ。彼奴も男磨く奴。おれが難儀も知て居る。如才はあるまい。氣遣しやるな。ヤアお初」謡 初瀬も遠し難波寺。名所多き鐘の音つきぬや法の聲ならん。山寺の春の夕暮來て見れば、先なは徳「これ九平次、ア、不敵千萬な。身共方へ不届して遊山どころであるまいぞ。サア今日埒明ふ」と、手を取て引留れば、九平次興覺顔になつて、九「何んの事ぞ徳兵衛、此連衆は町の衆。上鹽町へ伊勢講にて只今歸るが、酒も少し飲で居る。利腕把て如何する事ぞ。鹿相をするな」と笠を取れば、徳「イヤ此徳兵衛は鹿相はせぬ。後の月の二十八日、銀子二貫目時貸に此三日切に貸たる銀、それを返せといふ事」と、言せも果てず九平次、つらかくと笑ひ、「氣が違ふたか徳兵衛。われと數年語れども、一

聊爾一粗忽

手形一證文

錢借た覺えもなし。聊爾な事を言懸け、後悔するな」と振放せば、連も笠をはらりと脱ぐ。徳兵衛はつと色を變へ、「言ふなく九平次。身が此度の大難儀、如何もならぬ銀なれども、晦日只た一日で、身代立ぬと歎いたゆゑ、日来語るは此處らと思ひ、男づくで貸たぞよ。手形も要らぬといふたれば、念の爲じや判しやうとおれに證文書かせ、お主が捺た判がある。左様いふな九平次」と、血眼になつて責蒐る。九ム、ウ何んじや。判とは何れ見たい」徳「チ、見せいで置ふか」と、懐中の鼻紙入より取出し、「お町衆なら見知もあらふ。コリヤ是でも争ふか」と、披いて見すれば、九平次横手を打ち、「成程判はおれが判。エ、徳兵衛、土に食付死ぬるとても、斯様な事は爲ぬものじや。此九平次は後の月の二十五日に、鼻紙袋を落して、印判共に失なふた。方々に張紙して尋ぬれども知れぬゆゑ、此月からコレ此お町衆へもことはり、印判を替たはやい。二十五日に落した判を八日に捺れうか。さては其方が拾ふて、手形を書いて判を捺る、おれを強請て銀取ふとは、謀判よりも大罪人。こんな事をせうよりも盗みをせい徳兵衛。エ、首を斬せる奴なれど懇意甲斐に許して置く。銀になるなら仕て見よ」と、手形を顔へ打付け、はつたと白眼む顔付は、けんによもなけにしらくし。徳兵衛くわつと胸急て大聲上げ、「扱巧んだりく。一

八日一廿八日の略

けんによ云ヤにて平氣を懸ふ



杯食ふたか無念やな。ハテ何んとせう。此銀をのめくと、只己に取られうか。斯う巧んだ事なれば、でんどへ出ても俺が負け。腕前で取て見せう。コリヤ平野屋の徳兵衛じや。男ぢやが合點か。おのれが様に友達を騙つて倒す男じやない。サア來いと掴付く。九「ヤア洒落な丁稚上りめ、投てくれん」と胸倉取り、撲合ひ捻合ひ敲き合ふ。お初は跣で飛で下り、「あれ皆様頼みます。妾が知たお人じやが、駕籠の衆は居やらぬか。あれ徳様じや」と身をもがく。詮方なくも哀れなり。客は素より田舎者、「怪我があつてはならぬぞ」と無體に駕籠に押入るよ。初「いや先づ待て下さんせ。なふ悲しや」と泣聲ばかり、急けくと一散に駕籠を早めて歸りけり。徳兵衛は只一人、九平次は五人連れ、四邊の茶屋より棒すくめ、蓮池まで追出し、誰が踏やら叩くやら、更に分ちは無りけり。髪も解かれ帯も解け、彼方此方へ伏轉び、徳「やれ九平次め畜生め。おのれ生て置ふか」と、よろほび尋ね廻れども、逃て行衛も見えばこそ。其儘其處にどうと居り、大聲上て涙を流し、「孰れもの手前も面目なし恥しよ。全く此徳兵衛が言かけしたるで更になし。日頃兄弟同前に語りし奴が事といひ、一生の恩と歎きしゆゑ、明日七日此銀がなければ、我等も死ねばならぬ命がはりの銀なれども、互の事と役に立ち、手形を我等が手で書せ、印判捺て其判を、前方

逆ねだれ—逆ね  
ぎくはす

笑止—氣の舞

鯛川—巻むと川  
の名とかく  
空背貝云々—因  
なき貝の如く本  
心を女に毒はる

に落せしと町内へ披露して、却て今の逆ねだれ。口惜や無念やな。此如く踏叩かれ、男も立たず身もたよす。エ、最前に搦付き、喰付てなりとも死なんものを」と、大地を叩き切齒をなし、拳を握り歎きしは、道理とも笑止とも、思ひやられて哀れなり。眞ハテ斯ういふても無益の事。此徳兵衛が正直の心の底の涼しさは、三日を過ぎず、大阪中へ申譯はして見せう」と、後に知らると詞の端、「何れも御苦勞かけました。御免あれ」と一禮述べ、破れし編笠拾ひ着て、顔も傾く日影さへ、曇る涙に搔暮れく、悄然歸る有様は、目もあてられぬ 三重 戀風の、身に岨川流れては、其空背貝現なき、色の闇路を照せとて、夜毎に燈す燈火は、四季の螢よ雨夜の星か。夏も花見る梅田橋。旅の鄙人、地の思ひ人、心々の譯の道 知るも迷へば知らぬも通ひ、新色里と賑はしよ。無慙やな、天満屋のお初は、内へ歸りても今日の事のみ氣にかより、酒も飲れず氣も濟す、しくく泣て居る處へ、隣りの娼や朋輩の烏渡來ては、早なふ初様、何も聞かせぬか。徳様は何やら仔細の悪い事ありて、たんと撲れさんしたと、聞たが眞か」といふもあり。乙「ヤイ儂が客様の咄ぢやが、踏れて死んしたけな」といふもあり。騙瞞をいふて縛られての、偽判して括られてのと、碌な事は一ツも言はず、問ふに辛さの見舞なり。初「ア、いや最う言ふて下んす

のけたい一仕舞  
ひたい

ぼつとりもの一  
九顔の愛嬌もの

ぬつペリ一容顔  
の奇門なる

な。聞けば聞くほど膨痛み、妾から先へ死さうな。寧ろ死でのけたいと、泣より外の事ぞなき。かよる處へ此里馴れぬ人體に、家來に提灯燈させて、此處か其處かと立覗く。下女の玉立寄て、「これ親父様。どんなお顔が物好きぞ。若い衆と同じ様にうろくせずと、先ア此方へ入らしやんせ」と、引留れば、「ム、天満屋といふ茶屋は、此處ではないか」と尋ねれば、玉ア、成程々々お尋ねの天満屋。十四五から三十までの、圓顔而長望み次第。戀知りの初様とて、町一番のほつとり者。お目にかけん」と頼付く。寄「されば其初といふ女に用の事ある間、烏渡呼出して」といふや否、玉「ム、さては最うお馴染か。幸ひ只今お暇あり。いざお入り」といひければ、寄「イヤ、左様の者でなし。逢ふて一言いふ事あり。頼む」といへば、玉「さてはお客のお連様か。そんなら疾から言ふたが好い。コレお初様、客様のお連様が」と傳へれば、初は彼處に立出で、「誰さんじゃ」と差覗けば、寄「ム、お初とはお身の事な。和女が内に居るからは、徳兵衛めも來て居る筈。此處へ早う呼で下されい」初「イ、エ徳様は未だ見えませぬが、先づ此方様は誰様じゃ」寄「ヲ、身共は徳兵衛めが叔父親方平野屋久右衛門といふもの、和女を見るも恨めしい。彼の正直な徳兵衛めをば、ぬつペりとした顔をして、何の様に瞞したやら。今日此頃は平生の魂が入替り、錢金を湯

水の様に、夜々通ふのみならず、今日は晝から得意衆へ、商ひに廻るといふて内を出て、今になりても歸らぬゆゑ、久右衛門が引ずりに参つた。好い加減にして戻されよ。左なくばお爲が悪からふ」と、苦々しく言ければ、お初はじつと聲を沈め、「さてはお前は旦那様か。内方の入譯も咄で聞て居ますれば、妾が憎いはお道理。それ程の事辨へぬ妾でもなければども、思ひ切るにもきらられぬは、二人が因果と心召し、堪忍して下さんせ。左様した中の事なれば、再々見えはしますれど、よしない金は遣はせませぬ。必ず恨みて下んすな。それに就ては、お前へ立る二貫目の銀も、御手にありしをば友達の義理合にて、油屋の九平次めに用に達てやらんしたを、今日生玉で逢んして、戻してくれとあつたれば、借らぬと諍ふのみならず、言懸するの、騙瞞のと、徳様一人を四五人して、撲たり踏だり仕居たを、妾もお客と行合せ、喰付たうは思へども、お客の手前を憚りて、様子を見さして戻りしが、若や怪我は無つたかと、是のみ案じ居まする」と、泣く泣く語れば、久右衛門大きに急て、「ナニ九平次めが徳兵衛を踏たるとや。徳兵衛事は久右衛門が家來ながらも甥じやとは、誰知らぬ者ない處に、假し理にもせよ非にもせよ、彼の生玉のでんどにて、九平次めに踏せては、此久右衛門が立ものか。最う徳兵衛にも

先には一九平次  
の方にては

夜の編笠一人目  
を忍ぶ  
おうへー入口の  
隠裏のある所  
やくたい一隠た  
れ

せつなき一切な  
るにて甚だしき  
事

逢ますまい。是から直に九平次が宿へ踏込み、おのれ先づ擲付ても喰付ても、存分言で置  
うか」と、走り行くを引留め、初「お腹の立のは御尤。併し先には巧んだ事。此上麗相のあ  
る時は御損の上の恥になる。何の道にも、徳様が追付け是へ見える筈。逢ふて共々談合し  
て、往て下さんせ」と言ひければ、久ム、すれば是非とも徳兵衛が、是へ来るに極つたか。  
然らば逢ての上の事。少時此處を貸給へ」と、見世の先に腰懸れば、初「イヤノウ此處は商  
ひ見世、内へ入つて待しやんせ。お妻さま、お吉さま、此御客をば小座敷へ通しまして」と  
聞よりも、「あい」と答へて二人の妓、「さア御座んせ」と取付けば、久「サア參れなら參らふ  
が、これお初殿、構へて身共は金は拂はぬぞや。必ず念をつかふた」と、言捨て奥にぞ入り  
にける。お初は見世につくくと、物打案じ居る處へ、表を見れば夜の編笠徳兵衛、思ひ  
詫たる忍び姿、ちらと見るより飛立ばかり。走り出んと思へども、おうへには亭主夫婦、  
上り口に料理人、庭では下女がやくたいの、目が繁ければ左もならず。初「ア、いかう氣が  
盡た。門見て來ふ」と密と出、初「なふこれは如何ぞいの。此方様の評判いろくに聞たゆ  
ゑ、其氣遣ひさく、狂氣の様になつて居たはいのう」と、笠の内に顔さし入れ、聲を立す  
の隠し泣き、あはれせつなき涙なり。男も涙にくれながら、「聞きやる通のたくみなれば、

言ふ程おれが非に落ち。其内四方八方の、首尾はぐわらりと違ふて来る。最早今宵は過されず。とんと覺悟を極めた」と嘯けば、内よりも、「世間に悪い取沙汰ある。初様内へ入らんせ」と、聲々に呼入る。初「チ、くあれじや。何も咄されぬ。妾が爲るやうに成んせ」と、襦袢の裾に隠し入れ、はふく仲戸の沓脱より忍ばせて、縁の下屋に密と入れ、上り口に腰打懸け、烟草引寄せ吸付て、素知らぬ顔して居たりけり。斯る處へ九平次は、悪口仲間二三人、座頭まじくらどつと來り、「ヤア妓様達、淋しさうに御座る。何と客になつてやらうかい。何と亭主久しいの」と、のさばり上れば、主人「それ煙草盆、お盃」と、ありべかよりに立騒ぐ。丸イヤ酒は置や、飲で來た。扱咄す事がある。これの初が一客平野屋の徳兵衛めが、身が落した印判拾ひ、二貫目の偽手形で騙ふとしたれども、理屈に詰つて上句には、死なす甲斐な目に遭ふて一分は廢つた。向後此處らへ來るとも油斷しやるな。皆に斯う語るのも徳兵衛めがうせ、まつかい様にいふとても、必ず誠にしやるな。寄る事も要らぬもの。何うで野江か飛田もの」と、誠にやかにいひちらす。縁の下には齒を喰しぱり、身を慄はして腹を立るを、初は是を知らせじと、足の先にて押沈め、押へ沈めし神妙さ。亭主は久しい客の事、是非の返答なく、去さらば何ぞお吸物」と、紛かしてぞ立に

野江、飛田―仕置場  
押沈め―足にて  
衛いてなだむる

まじくら―交り  
ありべか―トリ  
常の通りに

身のみしー身の  
畏難

審くなかるー有  
難くもなし

相場が悪いー聲  
行が悪い

ける。初は涙にくれながら、「左のみ利根にいはぬもの。徳様の御事、幾年馴染心根を、明し明せし中なるが、それはくいとほけに、微塵譯は悪うなし。頼もし達が身のひしで、瞞されさんしたもののなれども、證據なければ理も立たず。此上は徳様も、死なねばならぬしなるが、死ぬる覺悟が聞きたい」と、獨語に擬へて、足で問へば打領き、足首取て咽笛撫で、自害をしようとぞ知らせける。初ヲ、其善々々。何時まで生ても同じ事、死で恥を雪がいでは」といへば九平次恂として、「お初は何を言るとぞ。何の徳兵衛が死ぬるものぞ。若亦死んだら其後は、おれが懇してやらふ。和女も俺に惚てじやけな」といへば、初「こりや忝かろはいの。妾と懇さあんすと、此方も殺すが合點か。徳様に離れて片時も生て居やうか。其處な九平次のどうすりめ。阿呆口を叩いて人が聞ても不審が立つ。どうで徳様一所に死ぬる。妾も一所に死ぬるぞやいの」と、足にて突けば、縁の下には涙を流し、足を取て押戴き、膝に抱付き焦れ泣き、女も色に包みかね、互ひに物は言ねども、膽と膽とに應へつよ、しめり泣にぞ泣居たる。人知らぬこそ哀れなれ。九平次も氣味悪く、「相場が悪いおちやいなふ。此處な妓衆は異な事で、俺們が様に金遣ふ大盡は嫌ひさうな。阿佐屋へ寄て一杯して、ぐわらく一分を撒散し、そしていんだら寢

よからふ。ア、懐が重たうて歩きにくい」と、悪口だらけ言散し、喚いて外へ出けるを、お初は如何も堪られず、「死に行く身の道連れに、おのれ瞞して殺さう」と、心一つに思案して、ずつと立て引留め、初「只今言ふた悪口は、勤めする身の義理なれば、左のみ心にかげなさんすな。有様いへば憎うない。こな男め」と纏るれば、九平次は振返り、「こりや又味な挨拶じやが、そんなら我々に逢ふ心か」初「ハテさて愚鈍な男や」と、手を取り行けば連共は、「九平次此處は引れまい。今宵も明日も明後日も、揚詰の大々盡、お船がすはつた。我々は氣を通すぞ」と、聲々に悪口いふて歸りける。亭主夫婦は悦びて、「サア九平次様一時もはやく二階へお越あれ。初もお側へはいつて寝や。早ふ寝やや」といひければ、初「そんなら旦那様、内儀様、最うお目にはかよりますまい。さらばで御座んす。内衆もさらばく」と餘所ながら、暇乞して閨に入る。これ一生の別れとは、後にこそ知れ氣も注かぬ、愚の心不便さよ。其それ籠の下に念を入れ、肴を鼠に引するな」と、見世をあけつ門鎖つ、寢より早く高敷。如何なる夢も短夜の、八つになるのは程もなし。初は白無垢死扮装、懸路の闇の黒小袖、上に打かけさし足し、二階の口より差覗けば、男は下屋に顔出し、招き領き指さして、心に物をいはすれば、梯子の下に下女寝たり。吊行燈の火は明し、如



有明—夜明返行  
してかく行燈

苦しき—寫の録  
録るとかけたり

横の戸—巻にか  
り又符既るゑあ  
り(翻波土塵)

何はせんと案ぜしが、椽欄箒に扇子を付け、箱梯子の二つ目より、煽ぎ消せども消えかぬる、身も手も伸しはたと消せば、梯子よりどうと落ち、行燈消えて暗かりに、下女はうんと寢返りし、二人は胴を慄はして、尋ね廻る危さよ。亭主奥にて目を覺し、「今のは何じや。女子ども、有明の火も消えた。起て燈せ」と起されて、下女は唾そに目を擦く、素体にて起出「燧火箱が見えぬ」と、探り歩くを障らじと、彼方此方へ這絆はるゝ玉葛、苦しき闇のうつよなや。やうく二人手を取合せ、門口まで密と出、懸鑑外せしが車戸の音訝しく開兼し折から、下女は燧火をはたくと、打つ音に紛らかし、丁と打ば密と開け、かちく打てばそろく開け、合せくて身を縮め、袖と袖とを横の戸や、虎の尾を踏む心地して、二人續いて突と出、顔を見合せ、「ア、嬉し」と、互ひに息をほつとつき、初「さるにても九平治めを殺して退きよと思ふたに、此方らに心の急くまよに、生て置たが悔しさよ」と、お初は涙に振返れば、鴛ア、なふそれも迷ひなり。斯う死ぬる身の約束ぞ。人にも世にも恨みなし。急ぎ給へ」と手を引、彼處を走り出て行く。斯とは知らずやうやうと、下女は火燈し、「これはさて、門の戸が開てある。皆氣の注かぬ」と懸鑑をしめて寢間へぞ入にける。少時くあつて男一人、驚忙しく走り來り、天満屋の戸を打敲き、「油

町次云々町内にて毎月家々の印を檢す

も宿老一町内の所締

砂一無駄

屋九平次様、急用ありて手代茂兵衛が参つた。言次で給はれ」と呼はる聲、九平次が寐耳へ入て打驚き、梯子忙しく下けるを、後に續いて久右衛門、聞くとも知らず戸を押開け、  
 「ム、茂兵衛か。何の用にて周章だしい。何うぞく」といひければ、茂「サレバ今日、町次の判形觸れて参りしゆゑ、お前のお歸り知れぬと思ひ、懸視の二重目な印判持て参りしに、お宿老殿が仰せられしは、此印判は、先月の二十五日に落したとて、町々に貼紙せし其印判が、懸視にあつたとは呑込まぬ。何分にも九平次に、逢ふて容子を聞かんまよ、急いで呼に遣はせと、内へ人橋かよるゆゑ、方々尋ね参りし」と、いへば九平次聲顫はし、「ヤレ行過た出酒張者。おのれにかより九平次が、最う一分が廢つたり。其印判を失ふたと、いふばつかりで徳兵衛めに預つた二貫目を、とうく砂に仕おほせたに、内にあつたと知られては、銀を取らるゝのみならず、如何も言譯立たぬ事。こりやマア何としたもの」と頭搔ても濟ぬ事。九道々思案して見よ」と、出んとするを久右衛門、腕を取て引戻し、「九平次待れい用がある。遣らぬく」とせりかける。九平次恟としたりしが、騒がぬ振にて、「これや久右殿飲つけぬ茶屋酒過ての酔狂か。さもあれ男の利腕を取るは、如何ぞ」と突除くれば、久右衛門聲を上げ、「ア、いふまいく。様子は篤と聞拔た。甥を踏だる返報

たまか一細かに  
心を用ふる（信  
實集覽）

げじいた一着眼  
する

に、此の合口を振舞んと、ずばと抜けば二人の者、「やれ狼藉者、人殺し」と聲々に呼ばれ  
ば、亭主、女房、男共、駈寄て取捲けば、久右衛門聲を沈め、「卒爾召されな各々、全く  
狼藉者ならず」と、彼處にどうと押直り、久コリヤ兩人の奴輩、久右衛門が暇やるまで、一寸  
でもにじつたら胸腹を刺るぞ」と、睨つけられて二人の者、もじくとして居たりけり。  
久右衛門亭主に對ひ、久身共は平野屋久右衛門とて、徳兵衛が親方、誠は叔父と甥との中、  
商賣方にも精を出し、心ざまもたまかなゆるゑ、身共は子とて持ませず、女房が姪と嫁せ、  
後繼せんと相談極め、敷銀として二貫目を、はや親里へ遣はせしに、徳兵衛めは此内の初  
と、兎や角契約の義理が立たぬといふ事か、さし極りし談合を打破りて得心せず。其處  
も身共が料簡して、若氣は誰しもあるならひ、それ程思ふ中ならば、行々は我思案にて  
夫婦にせんと心底に、思ふも甥の不便さゆるゑ。女房は姪を嫌はれしと、やけ腹立に打當  
て、二貫目の銀取て來い。戻せくとせつかれて、此程在所へ參りしが、二貫目の銀在  
所から、成程取て歸りしを、陰から聞けば女房へは一錢も戻さぬゆるゑ、遣ひ捨たの、け  
じいたのと、わすらるゝのを苦にしてか、今朝町へ出て暮るまで、待てどもく歸らぬゆ  
ゑ、面目なさに家出をも、したかと思ふ不便さに、一分立て取らせん爲、女房に隠し、

それをば云々  
丁稚の言を聞け  
ば此の九平次が  
となり

代しか一欲しく

ひがいのうた弱  
くはびら一銀枚  
の儀、大な足

二貫目の銀をば密と懐中し、此處へ來りてお初に逢ひ、咄を聞けば九平次めが、今日生玉にて徳兵衛を、散々に打擲したるよし。はら腸が裏返り、二三度も駈出しを、お初がたつて袖に縫り、兎角に一應徳兵衛に逢せんといはれしゆゑ、うつらくと小座敷に、ねぶりをとぎに居たりしに、非道は天命、只今彼奴が駈來り、九平次に咄した事、後の證據に各々も、篤くと聞て居て下され。月次の判形に、懸視の二重目の印判持て参りしに、お宿老殿が此判は、先月二十五日に紛失したといふ判が、内にあるのは訝しいと、人橋かけて呼に來ると、サアおのれ斯うは言はなんだか「アイヤ、左様は言ひませぬ」久「ナント實正言はぬか」と、合口を差付れば、「ア、成程左様に言ひました」久「それをば聞くと此和郎が、顔色が違ふて、其印判を落したといふたばかりに徳兵衛めに、二貫目といふ銀をまんまと砂にしてのけたと、先づ此様に吐さぬか」と、合口喉に閃せば、及「はて左様言ふたにして欲しか、左様いふにしてやろ」と、そろく立て退く處を、久右衛門大聲上げ、「やれ盗人め生拘め。假し二貫目の銀子にて、おのれが身代立たぬなら、成程銀はおのれに遣る。彼のひがいな小男を、おのれが大きなくはびらで、能ふもく踏居たな。殊に所も所柄、彼の生玉のでんどにて、額に毛拔も當る身が、頬恥搔て何んと

額に毛抜一男を  
つくる

それともに一モ  
れと共に  
頼む身一徳兵衛  
の事  
此方一主人

盗人に甥一甥に  
負錢をかけたたり

して、人中へは出られぬ筈。戻らぬこそ道理なれ。自害をしたか、淵川へ身を投たには極つた。命の敵金の仇。憎いとも無念ともおのれが頭のぎりぐりから、爪先まで斬刻んでも、是が腹が癒るものか」と、掴付き搔しやなぐり、撲ど叩けど世の中の、理に勝つ力あらざれば、兎角うも言はず九平次は、うちくしてこそ居たりけれ。亭主は見兼ね立寄り、「成程お前の御尤。併ながら、徳様のお聲を最前聞きました。お初も此處へ出ぬから、未だ御座るに極た。御機嫌直しに呼ませ」と、小座敷、奥の間、彼處、此處、尋ねても居ず。二階から下女の玉は走下り、「お二人ともに見えませぬ。お初様の寢所に書た物が御座んした。これ見たまへ」と差出せば、亭主取上げ「南無三寶、一人の者が書置じや、もはや心中に出たものぞ。やれ男ども、女ども、手別をして追蒐よ。未だ其處らには居ぬ事か。ふところ探せ柵探せ。探せく」と聲々に、騒ぎ惑へば久右衛門、九平次を引捕へ、「徳兵衛が敵、おのれをば代官殿へ連て行き、只今思ひ知らすべし。それともに先づ各々は、片時も早く斷付て、最後を留て給はれ」と、頼む身よりも頼まるよ、此方は大事の奉公人、殺すといふは正眞の、生た金をば盗人に、甥御恨めしつれなしと、互ひに泣いつ泣惑ひ、其方彼方へ走り行く、哀れさ辛さ淺ましさ。後に燧火の石の火の、命の末こ

そ三重短かけれ。

道行血死期の霜

仇しが原一馬場

響心なき云々  
苦しき二人は雲  
の無心なるを後  
か牛織女の千  
歳返與るを羨み  
て泣く(磐波土  
産)

どうて女房云々  
一松の萩葉糸五  
にゑる唄

此世の名残夜も名残、死に行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜一足つつに消て行く、  
 夢の夢こそ哀れなれ。あれ數ふれば曉の、七ツの時が六ツ鳴りて、残る一ツが今生の、  
 鐘の響きの聞納め、寂滅爲樂と響くなり。鐘ばかりかは草も木も、空も名残と瞰上れば、  
 雲心なき水の面、北斗は冴て影映る、星の妹脊の天の川、梅田の橋を鵲の橋と契りて何  
 時まで、我と和女は夫婦星、必ず添ふと繩寄り、二人が中に降る涙、河の水嵩も増る  
 べし。向ふの二階は何屋とも、覺束情最中にて、未だ寝ぬ火影聲高く、今茲の心中善惡  
 の言の葉草や繁るらん。聞くに心も吳織、緩なや昨日今日までも、餘所に言ひしが明  
 日より、我も噂の數に入り、世に謠はれん。謠はば謠へ、謠ふを聞けば、「どうで女房  
 にや持やさんすまい。いらぬものじやと思へども、實に思へども歎けども、身も世も思  
 ふ儘ならず。何時を今日とて今日が日まで、心の舒し夜半もなく、思はぬ色に苦しみに、  
 如何した事の縁じややら。忘るゝ暇はないわいな。それに振捨て行ふとは、遣やしませぬ

平時は左もあれ  
—いつもは兎も  
あれ今宵に限つ  
て  
心も夏—心もな  
しにかく  
命追ゆる—篇の  
聲が命を追うて  
死を促す如し

ぞ手にかけて、殺して置いて行んせな。放ちはやらじと泣ければ、「唄も多きに彼の唄を、時こそあれ今宵しも、謠ふは誰そや聞くは我。過にし人も我々も、一ツ思ひ」と絶付き、聲も惜まず泣居たり。平常は左もあれ此夜半は、せめて暫は長からで、心も夏の夜のならひ、命追ゆる雞の聲。明なばうしや天神の、森で死んと手を引、梅田堤の小夜鴉、明日は我身を餌食ぞや。初「誠に今歳は此方様も、二十五歳の厄の年、妾も十九の厄年とて、思ひ合ふたる厄祟り、縁の深さの験しかや。神や佛にかけ置き、現世の願を今此處で、未來へ回向し後の世も、猶ほも一ツ蓮ぞや」と、爪繰る珠數の百八に、涙の玉の數添て、盡せぬ哀れ盡る道、心も空も影暗く、風しんくたる會根崎の、森にぞ辿り着にける。彼處にか此處にかと、拂へば草に散る露の、我より先にまづ消て、定めなき世は稻妻か、それかあらぬか。初「ア、怖、今のは何といふものやらん」猶「チ、あれこそは人魂よ、今宵死するは、我のみとこそ思ひしに、先立つ人もありしよな。誰にもせよ、死出の山の伴ひぞや。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」の聲の中、「あはれ悲しや、又こそ魂の世を去りしは。南無阿彌陀佛」と稱ふれば、女は愚に涙ぐみ、「今宵は人の死ぬる夜かや。淺ましさよ」と涙ぐむ。男涙を潸然と流し、「二ツ連飛ぶ人魂を、餘所の上と思ふかや。正しう御身と我

魂の所在—魂の所在を一つに定めん

一箇の相生—根一つにて二本出てゐる  
徳兵衛—解くにかく  
浮名は云々—心中の名は殘さん

かゝれとて云々—心中せん爲に締めて來たる指帯にあらざ

魂よ「初」なに喃ふ二人の魂とや。はや我々は死したる身か「徳」チ、常ならば、結びとめん繋ぎとめんと歎かまし。今は最期を急ぐ身の、魂の所在を一所に栖まん。道を迷ふな違ふな」と、抱き寄せ肌を寄せ、かつぱと伏て泣居たる、二人の心不便なる。涙の糸の結び松、椶櫚の一樹の相生を、連理の契に擬へ、露の憂身の置處「サア此處に極めん」と、上着の帯を徳兵衛も、初も涙の染小袖、脱で懸たる椶櫚の葉の、其玉帯今ぞ實に、浮世の塵を掃ふらん。初は袖より剃刀出し、「若も道にて追手のかより、割れくゝになるとても、浮名は棄じと心懸け、剃刀用意いたせしが、望みの通り一所で死ぬる此嬉しさ」といひければ、徳「チ、神妙頼母し。左程に心落付からは、最期も案ずる事はなし。さりながら今際の時の苦患にて、死姿見苦しいはれんも口惜し。此二本の連理の木に身體をきつと結びつけ、潔う死ぬまいか。世に類なき死様の手本とならん」初「如何にも」と、淺ましや淺黄染、かよれとてやは抱え帶、兩方へ引張て、剃刀取てサラくゝと、帯は裂けても主様と、妾が問はよもさけじと、どうと座を組み二重三重、動がぬ様に慥と締め、徳「能ふ締つたか」初「チヲ締ました」と、女は夫の姿を見、男は女の體を見て、「這は情なき身の果ぞや」と、わつと泣入るばかりなり。「ア、歎じ」と、徳兵衛顔振上て手を合せ、「我幼少にて誠の父母に離



初秋の—初秋に  
て夫より後は逢  
はぬにの意

流涕慳る、云々  
—泣む心の内  
は餘程な道理也

斷末魔—臨終の  
苦

れ、叔父といひ親方の苦勞となりて人となり、恩を送らず此儘に、亡き跡までも兎や角と、御難儀かけん勿體なや。罪を許して下されかし。冥土に在す父母には、追付御目にかよるべし。迎へ玉へ」と泣ければ、お初も同じく手を合せ、「此方様は羨しや、冥土の親御に逢んとある。妾が父様母様は、健で此世の人なれば、何時逢ふ事のあるべきぞ。便は此春聞たれども、逢たは去年の初秋の、初が心中取沙汰の、明日は在所へ聞えなば、幾許かは歎きをかけん。親達へも兄弟へも、是から此世の暇乞。せめて心が通じなば、夢にも見えてくれよかし。懐しの母さまや。名残惜の父様や」と、しやくり上けく、聲も惜まず泣きければ、夫もわつと叫び入り、流涕慳るよ心意氣、ことわりせめて哀れなれ。初「何時まで言ふて詮もなし。はやく殺して」と、最後を急げば「心得たり」と、脇差するりと抜放し、徳「サア只今ぞ。南無阿彌陀々々々」と、いへども有繫此年月、愛し可愛と締て寢し、肌に刃があてられふかと、眼も暗み手も顫ひ、弱る心を引直し、取直しても猶顫ひ、突くとはすれど切先は、彼方へ外れ此方へ反れ、二三度閃く劍の刃、「あつ」とばかりに喉笛に、ぐつと通るか、南無阿彌陀、南無阿彌陀、南無阿彌陀、南無阿彌陀佛とくり通し、繰通す腕先も、弱るを見れば、両手を伸べ、斷末魔の四苦八苦、哀れといふも餘りあり。

徳「我<sup>われ</sup>とても後<sup>だく</sup>れうか。息<sup>いき</sup>は一度<sup>いちど</sup>に引<sup>ひき</sup>取<sup>と</sup>らん」と、剃<sup>かみ</sup>刀<sup>さきざと</sup>取<sup>と</sup>つて咽<sup>のど</sup>喉<sup>ご</sup>に突<sup>つ</sup>立<sup>た</sup>、柄<sup>つか</sup>も折<sup>を</sup>れよ刃<sup>は</sup>も碎<sup>くだ</sup>けと、えぐりくりく、目<sup>め</sup>も眩<sup>くら</sup>めき、苦<sup>く</sup>しむ息<sup>いき</sup>も、曉<sup>あかつき</sup>の、知<sup>ち</sup>死<sup>し</sup>期<sup>き</sup>につれ、絶<sup>た</sup>果<sup>は</sup>たり。誰<sup>た</sup>が告<sup>つ</sup>ぐるとは曾<sup>まね</sup>根<sup>ね</sup>崎<sup>さき</sup>の森<sup>もり</sup>の下<sup>した</sup>風<sup>かぜ</sup>音<sup>ね</sup>に聞<sup>き</sup>え、取<sup>とり</sup>傳<sup>つた</sup>へ、貴<sup>き</sup>賤<sup>せん</sup>群<sup>ぐん</sup>集<sup>じゆ</sup>の回<sup>ま</sup>向<sup>かう</sup>の種<sup>たね</sup>、未<sup>み</sup>來<sup>らい</sup>成<sup>じやう</sup>佛<sup>ぶつ</sup>疑<sup>ぎ</sup>ひなき戀<sup>こひ</sup>の、手<sup>て</sup>本<sup>ほん</sup>となりにけり。